

このほんしる

ねんぱん 5・6年版 No.216 しぜん・かんきょうの本 ほん
みどり せい あ ひ
緑の精にまた会う日

リンダ・ニューベリー／作 平澤 朋子／絵 野の 水生／訳（徳間書店）

ロンドンに暮らすルーシーは、いなかのおじいちゃんの家で、庭仕事を一緒にするのが大好き。おじいちゃんの庭には、庭仕事を手伝ってくれる『ロブさん』という緑の精がいるのです。ルーシーは、おじいちゃんからロブさんの話を聞くのをいつも楽しみにしていました。



そんなある日、おじいちゃんが亡くなり、家が売られることになりました。庭にいるロブさんはどうなってしまうの？ そう思ったルーシーは、あたしのところへきて下さいとロブさんへ手紙を書いて…。

きょうばし 京 橋 (3543) 9025
ちゅうおうくりつ にほんばし としょかん
中央区立 日本橋 (3669) 6207 図書館
つきしま 月 島 (3532) 4391

あの夏、ぼくらは秘密基地で

三輪 裕子／作 水上 みのり／絵（あかね書房）

亡^なくなったおじいちゃんが、みんなにはナイショで山荘^{さんそう}を持^もっていた事^{こと}がわかりました。山登^{やまのぼ}りが大好きなケン^{だ い す}は、夏休^{なつやす}みに早速お父^{さつそく}さんと妹^{いもうと}のジュンと、ど^{ところ}んな所^{たし}か確^いかめに行きました。山荘^{おも}は思^{おも}っていたよりず^りっと立派^{りっぱ}で、近^{ちか}くには登^{とざん}山^{つら}ができる山^{おおよこ}が連^{つら}なり、ケンは大^{おお}喜^{よろこ}びです。



ところが、山荘^{なか}の中^{もの}にはだれの物^{もの}かわからない荷^{にもつ}物が置^おいてありま^{ぬし}した。持^もち主^{しゅ}はだれ^{だれ}でしょうか？そし^かて、おじいちゃん^{りゆう}がこの山荘^{りゆう}をこ^かっそり買^かっていた理^{りゆう}由^{ゆう}とは？

砂上^{さじょう}の船^{ふね} 水上^{すいじょう}の家^{いえ} —アラル海^{かい}とツバル^{みずものがり}ふたつの水^{みづ}物語^{ものがたり}—
会^{あい}田^だ 法^{のり}行^{ゆき}／写^{しや}真^ま・文^{ぶん}（ポプラ社）

『環^{かん}境^{きやう}破^は壊^{かい}』や『地^ち球^{きゅう}温^{おん}暖^{だん}化^か』、一^{いち}度^どはみ^み耳^{みみ}にしてい^{ことば}る言^{こと}葉^は。

日^に本^{ほん}から遠^{とお}くはなれたウズベキス^こタ^{ばい}ン^{おお}にあるアラル海^ひ。工^{こう}場^{じやう}がで^ひきたた^あめにびわ湖^この100倍^{ばい}の大^{おお}きさの水^{みづ}が、干^ひ上^あがっ^あてしま^あいました。

一^{いっ}方^{ぱう}で南^{みな}太^{みな}平^み洋^{たいへい}にう^{ちい}か^{しまぐに}ぶ小^こさな島^{しま}国^{くに}ツバ^{かい}ル。温^{かい}暖^{すい}化^{めん}のえ^あい^あき^あょうで海^{かい}水^{すい}面^{めん}が上^あがり続^{つづ}け、島^{うみ}は海^{うみ}にしず^なみ^おか^おけていま^おす。

2^{ふた}つの国^{くに}の正^{せい}反^{はん}対^{たい}の環^{かん}境^{きやう}問^{もん}題^{だい}から、今^{いま}ぼ^{たち}く達^すの住^すむ地^な球^おで何^{なに}が起^おきてい^おるか考^{かんが}えてみ^みましょ^うう。

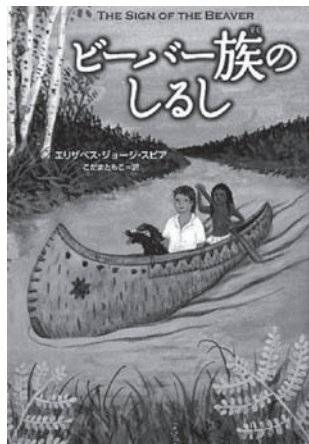


ビーバー族^{ぞく}のしるし

エリザベス・ジョージ・スピア／著 こだま ともこ／訳(あすなろ書房)

先住民^{せんじゅうみん}のインディアンの住む森^{す もり}に最初^{さいしょ}の白人^{はくじん}として、マットと父^{とう}さんはこしてきました。苦勞^{くろう}して丸太^{まるた}小屋^{こや}を建てた後^{あと}、父さんは家族^{かぞく}をむかえに行きました。しばらくの間^{あいだ} マットは一人^{ひとり}で暮らさなければなりません。

ある日^ひ、はちみつをとろうとしたマットは、みつばち^むの群れ^{ぐん}におそわれてしまいます。それを助^{たす}けてくれたのが、インディアンの老人^{ろうじん}と少年^{しょうねん}でした。その日からマットは食^たべものをもら^かう代わりに、少年^じに字^{おし}を教^{おし}えることになりました。



ミサゴ^{たに}のくる谷

ジル・ルイス／作 さくま ゆみこ／訳(評論社)

カラムは家の農^い場^{うじょう}を流^{なが}れる川^{かわ}で、勝^か手に魚^{さかな}をとっている同級生^{どうきゅうせい}のアイオナ^{いのな}を見^みつけました。彼女^{かのじょ}は大^{だい}事^じな秘密^{ひみつ}が書^かかれているといううすよごれたノート^もを持^もっていました。だれにも言^いわないと約^{やく}束^{そく}をしたカラムは、アカマツ^{こたち}の本立^{おおえだ}の大枝^ほに保^ご護^{ごう}鳥^{ちう}であるミサゴ^すのオス^{つく}が、巣^すを作^{つく}っていることを教^{おし}えてもらいます。二人^{ふたり}は誰^{だれ}にもないしよ^{おし}で、ミサゴ^{かんさつ}の観^{かん}察^{さつ}をするようになりますが、ある時^{とき}メスのミサゴ^いがつり糸^{いと}にひっかかり…。



りんぎょうしょうねん

林業少年

ほりごめ

かおる

堀米

薫

／作

スカイ

エマ

／絵

（新日本出版）

やまも だいだいつづ おおさわ け ちやうなん
山持ちとして代々続く大沢家の長男
きしゅ ぞ ふ しやうぞう きたい いっしん う
喜樹は、祖父庄蔵の期待を一身に受け
ていました。しかし喜樹は林業がどんな
もののかわかりません。

ある日、庄蔵のところに百年杉を
ひ たいというお客がやってきました。
『相対』と称する取引の一部始終を
あ 当たりにした喜樹は、日ごろとうっ
た かわった庄蔵のほこり高い姿を見た
きやうみ
ことで、林業への興味がわいてきました。

ばっ採の日、家族そろって百年杉の最期を見届けることになって…。



レイチェル・カーソン — [沈黙の春] で地球の叫びを伝えた科学者—

ジンジャー・ワズワース／著

上遠

恵子

／訳

（偕成社）

レイチェル・カーソンは殺虫剤や除草剤な
どのか かがくぶつ かんきやう せいぶつ たい きけん
どの化学物質が、環境や生物に対して危険で
あるとうったえた本を最初に書いた人です。

レイチェルは本を読んだり書いたりするの
がだいす おんな しぜん なか さんぽ
が大好きな女の子でした。自然の中の散歩
も好きで、へびのぬけがらや鳥の羽、きれい
な石などを宝物のように大切にしていまし
た。

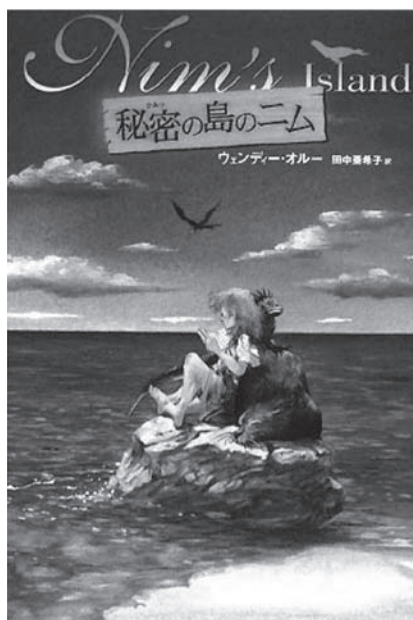
かのじょ さいのう さっか みち あゆ
彼女は物を書く才能があり作家への道を歩んでいましたが、とち
ゆ うから海洋生物学の勉強も始め、やがて農薬が生物におよぼす
えいきやうを危険だと思い始めました。



ひ み つ し ま 秘密の島のニム

ウェンディー・オルー／著 たなか あ き こ
田中 亜希子／訳（あすなろ書房）

ニムとお父^{とう}さんのジャックは、だれも知らない場所^{ばしょ}にある美しい島^{うつく}に住^すんでいます。ジャックが三日間仕事^{みっかかんしごと}で海^{うみ}に出^でる事^{こと}になった時^{とき}、ニムは一人^{ひとり}で島^{のこ}に残^{のこ}る事にしました。「毎日^{まいにち}、電話^{でんわ}するよ」と言い残^いして出^いかけて行^いったジャックでしたが、あらしの後^{あと}から電話^{でんわ}がつながりません。心配^{しんぱい}でたまらないニムでしたが、そんな時ジャックのパソコンに一通^{いっつう}のメールが届^{とど}きました。差出人^{さしだしにん}はなんと、ニムとジャックが大好きな作家^{だいす さっか}でした。



タマゾン川 ^{がわ} 一多摩川でいのちを ^{かんが} 考えるー

山崎 ^{やまさき} 充哲 ^{みつあき} / 著 (旬報社)

タマゾン川は東京都に流れる多摩川のことです。ではどうして多摩川をタマゾン川と呼ぶのでしょうか。ブラックバス、ピラニア、アリゲーターなどの外来種が、飼 ^が い主 ^{ぬし} によって多摩川に捨 ^す てられ、それらが増 ^ふ えアマゾン川のようになってしまったからです。

このままでは日本に昔 ^{にほん} からいる、ヤマメやスズキなどがいなくなってしまう。どうしたら、もとの多摩川にもどれるのでしょうか。

